

6 6 章 神の至高性と来臨

65 章に次いで、66 章は、祈りに対する神の答えであるが、イザヤ全書巻の最後の章にふさわしく、神の至高性を歌い上げ、そこから、神の祝福を受ける者と、さばかれる者について述べる。

1 節 主はこう仰せられる。

「天はわたしの王座、地はわたしの足台。
わたしのために、あなたがたの建てる家は、
いったいどこにあるのか。
わたしのいこいの場は、いったいどこにあるのか。」

כֹּה אָמַר יְהוָה הַשָּׁמַיִם כִּסֵּאִי וְהָאָרֶץ הָרִגְלִי ^{WTT} Isaiah 66:1

הֲגַלְי אֵי-יֵזָה בַּיֵּת אֲשֶׁר תִּבְנֶנּוּ-לִי וְאֵי-יֵזָה מְקוֹם מְנוּחָתִי:

<主はこう仰せられる>で始まる。<天はわたしの王座>は、「天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません」(1 列 8:27) というソロモンの祈りと矛盾するようであるが、いずれも、神の至高性を表現している(詩篇 11:4、イザ 6:1)。<地はわたしの足台>は、神の創造者であることを表現している(40:12 以下、21 以下、45:18)。<どこにあるのか>という疑問詞を二回繰り返して、神をお入れする所がどこにもないことを強調する。

2 節 これらすべては、わたしの手が造ったもの、

これらすべてはわたしのものだ。
——主の御告げ——
わたしが目を留める者は、
へりくだって心砕かれ、
わたしのことばにおののく者だ。

וְאֵת-כָּל-אֱלֹהִי יָדִי עָשָׂתָה וַיְהִי כָל-אֱלֹהִי ^{WTT} Isaiah 66:2

נֶאֱסֶי-יְהוָה וְאֵל-יֵזָה אֶבִּישׁ אֶל-עֵנִי וְנִכְחַת-רוּחַ וְחָרַד עַל-דִּבְרָי:

<これらすべて>は、神の造られたすべてのものを指す。<わたしのものだ>は、「ある」ということばである(欄外注)。それは物事の形成を指し、「これらすべては(神のみことばによって)なった」という意味である(創 1 章)。<主の御告げ>ということばによって、更に次に示される神の奥義の偉大さへの導入がなされる。それは、無限に偉大な至高者なる神が、最も低い所にまで降りて来られるという奥義である(57 : 15、61 : 1)。それは、①へりくだった、②

心砕かれた、③みことばにおののく者である。<へりくだった>は、単なる謙遜さではなく、「打ちたたかれて、絶望した状態」を指す。つまり、単なる倫理の用語ではなく、客観的にみじめな状況に置かれた者の持つ絶望感である。<心砕かれた>も単なる敬虔さとか柔和さでなく、①から生じる心の状態である。そこか生じる神のことばに対する態度も、知的満足や、教義を固守する頑迷さではなく、神のことばを救いの唯一の希望として待ち望む姿勢である。

3節 牛をほふる者は、人を打ち殺す者。

羊をいけにえにする者は、犬をくびり殺す者。

穀物のささげ物をささげる者は、

豚の血をささげる者。

乳香をささげる者は、偶像をほめたたえる者。

実は彼らは自分かつてな道を選び、

その心は忌むべき物を喜ぶ。

שׁוֹחֵט הַשּׂוֹר מִכֹּה־אִישׁ זֹבֵחַ הַשֶּׁה עֵרֶף כָּלֵב ^{WTT} Isaiah 66:3

מַעֲלֵה מִנְחָה דָם-תְּזִיר מִזְכִּיר לְבָנָה מִבְּרֶךְ אֲוֹן גַּם-הִמָּה

בְּחֶרֶוֹ בְּדַרְכֵיהֶם וּבִשְׁקוּצֵיהֶם נַפְשָׁם חָפְצָה:

神が目を留められる者と反対に、神が拒否される者について述べる。1:10-17と同じように、形式的な犠牲をささげる者たちについて述べる。<牛をほふる者>も、信仰がなければ<人を打ち殺す者>である。<羊をいけにえにする者>も信仰がなければ<犬をくびり殺す者>である。モーセの律法によれば、汚れた動物の首は折られなければならなかった(出 13 : 13)。その時、犠牲のすべての意味は無意味になった。<穀物のささげ物>は血を流さないささげ物であるが、信仰がなければ、それが<豚の血をささげる>ことになる(65 : 4)。<乳香をささげる者>は、「乳香を記念の部分としてささげる」と訳すほうがよい(欄外注。レビ 2 : 2,16、24 : 7)。<偶像> (ヘアーウエン) は「むなしいもの」とも訳すことができる。乳香を記念の部分としてささげるのは、神に喜ばれるためであるが、実際には、むなしい意味のない儀式になってしまっている。これら偽りの形式的儀式の背後にある動機は、自己の欲望に任せた勝手な歩みであり、忌むべき物を喜ぶことである。

4節 わたしも、彼らを虐待することを選び、
彼らに恐怖をもたらす。
わたしが呼んでもだれも答えず、
わたしが語りかけても聞かず、
わたしの目の前に悪を行い、
わたしの喜ばない事を彼らを選んだからだ。」

גַּם־אֲנִי אֶבְחַר בְּתַעֲלָלֵיהֶם וּמְגֹרְתָם אֲבִיא ^{WTT} Isaiah 66:4

לָהֶם יֵעַן קָרָאתִי וְאִין עֲוֹנָה דְבַרְתִּי וְלֹא שָׁמְעוּ וַיַּעֲשׂוּ

הָרַע בְּעֵינַי וּבְאִשֶׁר לֹא־חָפַצְתִּי בְּחַרְוֹ: ס

<虐待する> (ヘタルリーム) は、文字どおりには「悩ませること」「侮辱すること」。不信の民が神を悩ませ(1 : 13-15)、あざけている状態を、神が選ばれるということ、すなわち、さばかれるという意味である。なお、このヘタルリームは、旧約聖書中、ここと 3 : 4「気まぐれ者」に用いられるだけの珍しいことばである。<わたしが呼んでもだれも答えず>以下は、65 : 12 と全く同じで、ただ、65 : 12 では「あなたがた」に語りかけられていたのに対し、ここでは三人称になっているだけの違いである。

5節 主のことばにおののく者たちよ。
主のことばを聞け。
「あなたがたを憎み、
わたしの名のためにあなたがたを押しつける、
あなたがたの同胞は言った。
『主に栄光を現せよ。
そうすれば、あなたがたの楽しみを見てやろう。』
しかし、彼らは恥を見る。」

שָׁמְעוּ דְבַר־יְהוָה הַחֲרָדִים אֶל־דְּבָרֹו אָמְרוּ • ^{WTT} Isaiah 66:5

אֲחִיכֶם שְׁנְאִיכֶם מְנַדִּיכֶם לְמַעַן שְׁמִי יִכְבֵּד יְהוָה וְנִרְאָה

בְּשִׂמְחַתְכֶם וְהֵם יִבְשׁוּ:

初めに<主のことばを聞け>があり、1 : 10 と全く同じ形である。<主のことばにおののく者たち>は、2節の信仰者を指す。ここには、カインの時以来、信仰者がいつも迫害されるといふ真理が確認されている。また、イエスは、山上の垂訓をはじめ多くの箇所、この箇所を考

えておられたに違いない（マタ 5 : 10-12、10 : 22、ヨハ 15 : 18、17 : 14）。しかし、主のしもべたちを迫害する者たちは、必ず恥を受ける。

6 節 聞け。町からの騒ぎ、宮からの声、
敵に報復しておられる主の御声を。

קוֹל שְׁאוֹן מְעִיר קוֹל מְהִיכָל קוֹל יְהוָה ^{WTT} Isaiah 66:6

מִשְׁלֵם גְּמוּלָה לְאִיבָיו:

7 節 彼女は産みの苦しみをする前に産み、
陣痛の起こる前に男の子を産み落とした。

בְּטָרֵם תַּחִיל יִלְדָה בְּטָרֵם יָבוֹא חֶבֶל לָהּ ^{WTT} Isaiah 66:7

וְהַמְּלִיטָה זָכָר:

8 節 だれが、このような事を聞き、
だれが、これらの事を見たか。
地は一日の陣痛で産み出されようか。
国は一瞬にして生まれようか。
ところがシオンは、
陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ。

מִי־שָׁמַע כְּזֹאת מִי רָאָה כְּאֵלֶּה הַיּוֹחֵל אֶרֶץ ^{WTT} Isaiah 66:8

בְּיוֹם אֶחָד אִם־יִוָּלֵד גּוֹי פְּעַם אַחַת כִּי־תִלְדָה גַּם־יִלְדָה צִיּוֹן

אֶת־בְּנֵיהָ:

9 節 「わたしが産み出させるようにしながら、
産ませないだろうか」と主は仰せられる。
「わたしは産ませる者なのに、
胎を閉ざすだろうか」と
あなたの神は仰せられる。

הֲאֲנִי אֲשַׁבֵּיר וְלֹא אוֹלִיד יֹאמֶר יְהוָה אִם־אֲנִי ^{WTT} Isaiah 66:9

הַמּוֹלִיד וְעֲצַרְתִּי אָמַר אֱלֹהֶיךָ: ׀

不信の者たちがさばかれる姿を生き生きと描写する。3-4 節で偽善の犠牲を供える者たちが、5 節では信仰者を迫害する者となり、6 節では<敵>となっている。7-9 節では、妊婦のたとえを用いながら、シオンの民があつという間にふえることを述べている。

10 節 エルサレムとともに喜べ。

すべてこれを愛する者よ。これとともに楽しみ。

すべてこのために悲しむ者よ。

これとともに喜べ喜べ。

שְׂמַחוּ אֶת־יְרוּשָׁלַם וְגִילוּ בָּהּ כָּל־אֲהַבֶיהָ ^{WTT} Isaiah 66:10

שִׂישׂוּ אִתָּהּ מְשׁוּשׁ כָּל־הַמְתַאבְּלִים עָלֶיהָ:

11 節 あなたは、

彼女の慰めの乳房から乳を飲んで飽き足り、

その豊かな乳房から吸って喜んだからだ。

לִמְעַן תִּינַקוּ וְשִׁבַעְתֶּם מִשָּׂד תִּנְחַמֶיהָ לִמְעַן ^{WTT} Isaiah 66:11

תִּמְצְוּ וְהִתְעַנְּגְתֶם מִזֵּיו כְּבוֹדָהּ: ס

シオンの敵が倒され、シオンの住民の数が激増して後、シオンに味方する者へのメッセー
ジが宣べられる。<すべてこのために悲しむ者よ>は、シオンへのさばきと荒廃が前提とさ
れている。イザヤ自身が、「主よ、いつまでですか」(6:11)と質問して荒廃のメッセージを受け
てから、ずっとシオンのために悲しんできたのであった。<慰めの乳房から>は、60 : 16 のた
とえと違って、シオンが全地の慰めの源になること。

12 節 主はこう仰せられる。

「見よ。わたしは川のように繁栄を彼女に与え、

あふれる流れのように国々の富を与える。

あなたがたは乳を飲み、

わきに抱かれ、ひざの上でかわいがられる。

כִּי־כֹה אָמַר יְהוָה הִנְנִי נֹטֶה־אֵלֶיהָ כְּנָהָר ^{WTT} Isaiah 66:12

שְׁלוֹם וְכִנְחָל שׁוֹטֵף כְּבוֹד גּוֹיִם וַיִּנְקַתֶם עַל־צַד תִּנְשְׂאוּ

וְעַל־בְּרָכִים תִּשְׁעֶשְׂעוּ:

13 節 母に慰められる者のように、
わたしはあなたがたを慰め、
エルサレムであなたがたは慰められる。

וּבִירוּשָׁלַם תִּנְחַמְנוּ: ^{WTT} Isaiah 66:13

וּבִירוּשָׁלַם תִּנְחַמְנוּ:

14 節 あなたがたはこれを見て、心喜び、
あなたがたの骨は若草のように生き返る、
主の御手は、そのしもべたちに知られ、
その憤りは敵たちに向けられる。」

תִּפְרַחְנָה וְנִוְדְעָה יְדֵי־יְהוָה אֶת־עַבְדָּיו וְזָעַם אֶת־אֵיבָיו: ^{WTT} Isaiah 66:14

תִּפְרַחְנָה וְנִוְדְעָה יְדֵי־יְהוָה אֶת־עַבְדָּיו וְזָעַם אֶת־אֵיבָיו:

12 節の初めには接続詞へキーがあって、前節とつながりがあることを示している。シオンとシオンの住民が、どれほどの平和と富と名誉と喜びを享受するかが示される。ここに用いられているたとえば、①<川>(→48 : 18)、②愛と保護に包まれた幼子(→49:22-23、60 : 4)、③生気あふれた若草のような<骨>である。さらに、<しもべたち>という語で呼ばれ、神の強い御手の下に保護されている。

15 節 見よ。まことに、主は火の中を進んで来られる。
その戦車はつむじ風のような。
その怒りを激しく燃やし、
火の炎をもって責めたてる。

לְהָשִׁיב בְּחֶמְהָ אָפוּ וְנִגְעַרְתּוּ בְּלֵהָבֵי־אֵשׁ: ^{WTT} Isaiah 66:15

לְהָשִׁיב בְּחֶמְהָ אָפוּ וְנִגְעַרְתּוּ בְּלֵהָבֵי־אֵשׁ:

16 節 実に、主は火をもってさばき、
その剣ですべての肉なる者をさばく。
主に刺し殺される者は多い。

כִּי בְּאֵשׁ יְהוָה נִשְׁפָּט וּבְחַרְבוֹ אֶת־כָּל־בָּשָׂר ^{WTT} Isaiah 66:16

וּרְבוֹת חַלְלֵי יְהוָה:

15 節の初めにも接続詞へキーがあって、前節とかかわりのあることを示している。前節の「その憤りは敵たちに向けられる」の展開であるが、<見よ>ということばによって、さばきが強調されている。<火>は、イザヤ書では再々神のさばきのシンボルとして用いられている(10 : 17、30 : 27,33、31 : 9)。神の戦車の比喻は、詩篇やハバクク書に見られる(詩篇 68 : 17、ハバ 3 : 8)。<すべての肉なる者>は、全人類に適用する解釈と(スマート)、17 節のユダヤ人に限定する解釈とがある(ヤング)。

17 節 おのが身を聖別して、身をきよめて、
園に行き、その中にある一つのものに従って、
豚の肉や、忌むべき物や、
ねずみを食らう者たちはみな、絶ち滅ぼされる。
——主の御告げ——

הַמְתַקְדָּשִׁים וְהַמְטַהְרִים אֶל־הַגְּנוֹת אַחַר ^{WTT} Isaiah 66:17

(אַחַד) [אַחַת] בְּתוֹךְ אֲכָלֵי בֶשֶׂר הַחֲזִיר וְהַשֶּׁקֶץ וְהַעֲכָבָר

יִחַדּוּ יִסְפוּ נְאֻם־יְהוָה:

65:3-4 の偶像礼拝者へのさばきをもう一度取り上げる。<おのが身を聖別して、身をきよめ>るのは、神にお会いするためであったが(創 35 : 2、出 19 : 22、民 8 : 7、11 : 18)、かえって偶像礼拝の準備となってしまった。<その中にある一つのもの>は難解である。マソレテ本文では男性形であり、何かの異教の習慣を指しているのかもしれない。死海写本と、マソラのケレー(読み替え)では女性形であるが、アシェラ女神を指しているのではないかと考えられる(→17 : 8)。<豚の肉>→65 : 4、レビ 11 : 7。<忌むべき物>は、偶像礼拝と結びついた汚れたものを指す。<ねずみ>はパレスチナにも 25 種ほどいたと言われるが、旧約聖書にはまれにしか用いられていない。レビ記では「とびねずみ」と訳され(11 : 29)、汚れたもののうちに含まれている。そのほかには、こことサムエル記第一、6 章(4,5,11,18)にのみ用いられる。偶像礼拝の本質については→44:9-20 注解。

18 節 「わたしは、彼らのわざと、思い計りとを知っている。わたしは、すべての国々と種族を集めに来る。彼らは来て、わたしの栄光を見る。

וְאֲנִי מַעֲשִׂיהֶם וּמַחְשַׁבְתֵּיהֶם בָּאָה לְקַבֵּץ ^{WTT} Isaiah 66:18

אֶת־כָּל־הַגּוֹיִם וְהַלְשָׁנוֹת וּבָאוּ וַרְאוּ אֶת־כְּבוֹדִי:

非常に難しいテキストで、新改訳のような補足や意識をすることによって、ある意味を示すようになる。すなわち、前節と対照的に、神が栄光と御力をもって全地に現れ、ご自分の民を集められると解釈する。それはすでに 2:2-4 で示された思想である。

19 節 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、遠い島々に、これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせよう。

וְשַׁמְתִּי בָהֶם אֹת וּשְׁלַחְתִּי מֵהֶם פְּלִיטִים ^{WTT} Isaiah 66:19

אֶל־הַגּוֹיִם תִּרְשִׁישׁ פּוּל וְלוּד מִשְׁכֵּי קָשֶׁת תְּבַל וַיִּגַּן הָאֲיִים

הַרְחִקוּם אֲשֶׁר לֹא־שָׁמְעוּ אֶת־שִׁמְעִי וְלֹא־רָאוּ אֶת־כְּבוֹדִי

וְהִגִּידוּ אֶת־כְּבוֹדִי בְּגוֹיִם:

<しるし> (ヘオース) →7: 11 注解。<のがれた者> (ヘパーリート) →4: 3 注解。<タルシシュ>→2: 16 注解。<プル>はエジプトに隣接するリビアの住民を指す。<ルデ>は、セムの子孫とされている地方(創 10: 22、I 歴 1: 17)。これは遠隔の地としてクシュ (エチオピヤ)、プテなどと併記され (エゼ 30: 5)、ツロの傭兵として描かれている (エゼ 27: 10)。おそらく北アフリカのリビア西方地域と思われる。<メシエク、ロシュ>は、70 人訳による。マソレテ本文では「弓を引く者」で(欄外注)、<プル>と<ルデ>にかかる。<トバル>は正確な位置は不明であるが、小アジア北東部、カパドキヤの一部に当たると考えられる。常にメシエクと一緒に出てくるので (エゼ 27: 13、32: 26、28: 2,3、39: 1)、70 人訳は弓を「引く」(ヘモーシェケー)を<メシエク>と読んだのであろう。<ヤワン>は、ノアの第三子であるヤペテの第四子である(創 10: 2)。<ヤワン>は言語的にはイオニアと同一であり、小アジアおよびエーゲ海に沿う地のギリシア人をイオニアと呼んだので、ギリシアの別名である。

20 節 彼らは、すべての国々から、あなたがたの同胞をみな、主への贈り物として、馬、車、かご、騾馬、らくだに乗せて、わたしの聖なる山、エルサレムに連れて来る」と主は仰せられる。「それはちょうど、イスラエル人がささげ物をきよい器に入れて主の宮に携えて来るのと同じである。

וְהָבִיאוּ אֶת-כָּל-אַחֵיכֶם מִכָּל-הַגּוֹיִם | מִנְחָה | ^{WTT} Isaiah 66:20

לְיְהוָה בַּסּוּסִים וּבַרְכָב וּבַצְבִּים וּבַפָּרָדִים וּבַכְרָרוֹת עַל

הָר קָדְשֵׁי יְרוּשָׁלַם אָמַר יְהוָה כְּאֲשֶׁר יָבִיאוּ בְנֵי יִשְׂרָאֵל

אֶת-הַמְּנַחָה בְּכָלִי טָהוֹר בֵּית יְהוָה:

21 節 わたしは彼らの中からある者を選んで祭司とし、レビ人とする」と主は仰せられる。

וְגַם-מֵהֶם אֶקַּח לְכֹהֲנִים לְלוֹיִם אָמַר יְהוָה: ^{WTT} Isaiah 66:21

2:2-4 の思想が再び繰り返される。しかし、彼らはただやって来るだけでなく、<祭司>や<レビ人>になって神に仕える者も選ばれる。

22 節 「わたしの造る新しい天と新しい地が、
わたしの前にいつまでも続くように、
——主の御告げ——
あなたがたの子孫と、あなたがたの名も
いつまでも続く。

כִּי כְּאֲשֶׁר הַשָּׁמַיִם הַחֲדָשִׁים וְהָאָרֶץ הַחֲדָשָׁה ^{WTT} Isaiah 66:22

אֲשֶׁר אֲנִי עֹשֶׂה עַמּוּדִים לְפָנַי נְאֻם-יְהוָה כֵּן יַעֲמֹד זְרַעְכֶם

וְשִׁמְכֶם:

23 節 毎月の新月の祭りに、毎週の安息日に、
すべての人が、わたしの前に礼拝に来る」と
主は仰せられる。

וְהָיָה מִדֵּי-חֹדֶשׁ בְּחֹדְשׁוֹ וּמִדֵּי שַׁבָּת בְּשַׁבְּתוֹ ^{WTT} Isaiah 66:23

יָבוֹא כָּל-בָּשָׂר לְהִשְׁתַּחֲוֹת לְפָנַי אָמַר יְהוָה:

新しい創造の思想が繰り返され(65:17)、イザヤ書の結語として、まことにふさわしい。初めの創造は、「非常によかった」(創 1 : 31)と言われながら、人間の墮落により汚されたが、<新しい天と新しい地>はいつまでも続く。<子孫>→61 : 9、65 : 23. アブラハムに与えられた約束(創 13 : 15-16、15 : 5 など)は完全に成就する。<名>→56 : 5、62 : 2、65 : 15.<新月の祭り>と<安息日>(→1 : 13 注解)は、神と人との交わり的手段として正しく用いられる。<礼拝>こそは、終末の新天新地においても、人間の最大の栄光であり、喜びの行為である。

24 節 「彼らは出て行って、
わたしにそむいた者たちのしかばねを見る。
そのうじは死なず、その火も消えず、
それはすべての人に、忌みきらわれる。」

וַיֵּצְאוּ וַיֵּרְאוּ בְּפִגְרֵי הָאֲנָשִׁים הַפְּשָׁעִים בֵּי כִּי ^{WTT} Isaiah 66:24

תּוֹלְעֵתָם לֹא תָמוּת וְאֲשָׁם לֹא תִכָּבֵה וְהָיוּ דְרָאוֹן

לְכָל-בָּשָׂר:

48 : 22 と 57:20-21 と同じように、「わざわい」の宣告によってイザヤ書は閉じられる。批評家たちはこれを挿入句とするが、その必要はない。<そむいた者>は、ヘパーシャの分詞形(→1 : 2 注解)。神に対してそむく不信の者には、死と永遠の滅びが待っているだけである。まことの福音を聞くためには、「心をかたくなにするメッセージ」(→6:9-10)の真意をよく把握し、神の御前に全く砕かれていなければならない。それゆえ、この結語をよく聞くことができるなら、そこから悔い改めて、「主のしもべのメッセージ」を聞く出発点があることを知るであろう。

* * * *

イザヤ書 66 章を、アモツの子イザヤ一人の預言として統一的に見る注解の試みは終わった。それは、前 740 頃から 60 年以上に及ぶ、激動する国際社会の中に、一貫して「心をかたくなにするメッセージ」を宣べ伝えた一人の預言者を、若年、壮年、晩年と大別して、当時の宗教的、社会的状況を描きつつ総合的にとらえようとする試みであった。特に 40 章以下は、第二イザヤ説、56 章以下は第三イザヤ説が通説になっている学界の中で、「しもべ」ということばを軸としながら、「隠れたる神」が、不信の思いにくらむ人間の前に「苦しみ、そして、死に、そしてよみがえるしもべ」として啓示されることにより、晩年のイザヤに新たな光を与えたのではないかと想定する大胆な試みである。この場合、通常軽視されがちな「偶像論」が、不信のイスラエルから理想のイスラエルへ、さらには、クロスと受難のしもべを結ぶ「主のしもべ」のラインの否定的側面を示す重要な位置を占めていることと、それが歴史的にはバビロン捕囚期に第二イザヤを考えようとする批評仮説では大きな障害になることを見た。

また、54 章以下を、「しもべ」の複数形のみが用いられている点からと(54 : 17、56 : 6、63 : 17、65 : 8,9,13,13,13,14,15、66 : 14)、これらがすべて「主のしもべ」の苦しみと死に基づく新しい民の意味に用いられているところから、「新しい民の賛美と礼拝」と区分して統一的なメッセージを見ようとしたことも、一つの新しい試みである。そこでは、もはや、53 章までの出エジプト伝承が中心ではなく、ダビデ伝承(55:3)、アブラハム伝承(63:16)、ノア伝承(54:9)などを含みつつ、創造伝承(55 : 13、60 : 19-21、65:17-25、66 : 22)が一番の基礎となっており、そこに立って新天新地の再創造が啓示され、その終末的な視点から、新しい民の賛美と礼拝が考えられている。この終末的な視点から、新しい民の賛美と礼拝が考えられている。この終末的な視点において「主のしもべの死とよみがえり」(53 章)は完了したものと見られており、その点では、イザヤの立っている時点と、今日の私たちのそれも一つと言えよう。実にイザヤのメッセージは、第一の創造と再創造を一望にした永遠性の時点から、罪と不信に満ちた自分と自分の生きている社会(イスラエルの民)に語りかけられている。そこで私たちも、イザヤと同じく新しい天と地の創造される日を待ち望みつつ、へりくだって、みことばにおののきつつ、礼拝と賛美の日を送るのである。